

出典：藤原長綱『京極中納言相語』／早稲田大学・一部改 90年

現代語訳

和歌は、ただ初句の五文字より結句の七文字まで、心に感じたままをすらすらと詠んだものが優れているのである。寂蓮法師の歌に、尾上より……山の峰から門前の田に吹き通う秋風に運ばれて、妻を呼ぶ雄鹿の声が稲葉を渡って聞こえてくることだ

(という歌があるが、作者には) とりわけ自讃の様子があって、『千載集』が選ばれた時、ぜひ入集してほしいと申ししたところ、撰者(である、父藤原俊成)は、「技巧的に上手で『面白い』歌である。この歌は道理の通らない歌ではないが、後世の歌を誤らせるであろう歌である。入集することはできない」と申されたが、作者は、「そのままこの和歌一首を入集させたとしても、何の不都合がありません(、何の不都合もありますまい)」ということをして、泣き泣き申したので、自分(「語り手の藤原定家」の推薦権により入集してしまつた。ところが、この頃「海辺の鹿」という題で、「松の枝もるさを鹿の声(「松の枝の間からもれ聞こえてくる雄鹿の鳴き声)」とございましたのは、「尾の上より」の歌と同じ趣でございました。(その歌で)「月だにつらき浦風に」と詠んでいる浦風だけは海辺の様子でございますが、それ以外には(歌題の)「海辺」の心は歌われていない。また「松の枝もる」などとございます下の句も、鹿の声がどのようにして松の枝を通つて聞こえてくるのか、納得できない。その昔、藤原家隆の歌に、

時雨ふる……時雨が降る時分になると、雄鹿の体の表面の毛の白い斑点も(冬毛に変わるために、)色つやがなくなりはじめることだなあ

とあったのを、作者(「家隆」)は、上手に詠んだとお思ひになつていたが、入道(「俊成」)は、「この歌も理屈は通っている。(しかし)冬毛に変わる頃に鹿の上毛の斑点がほんやりして、という点は、技巧的であり『面白い』。」と言つて、優れた歌であるとはなさなかつた。であるから、歌はいかにも技巧的な面白さをねらうべきではないと私は思つております。一方では、歌を誤らせると申し

置かれた俊成の言葉が、ぴったりと一致したのである。(このことは)「稲葉をわたる」「松の枝もる」の言葉の使い方と理解できるの
である。

解答

問 1 A ≡ (ア) C ≡ (ウ)

問 2 B ≡ (エ) D ≡ (ア)

問 3 (1) ≡ (イ) (2) ≡ (ア)

問 4 ① ≡ ④ ② ≡ (エ)

問 5 初め ≡ さりさり 終わり ≡ 詠みたる (16字) (1行目)

問 6 I ≡ (イ) II ≡ (イ)

問 7 自嘆の気ありて (7字) (3行目)

問 8 (ウ)

出典：『無名草子』二七 小野小町 / 東京都立大学 87年

現代語訳

「情緒を愛して歌を詠む者は、昔から多くいるようですが、小野小町こそは、容姿も、ふるまいや心配りをはじめとして、どんな点でもすばらしかったのであろう、と思われまます。

色見えで……表に現れることはなく色あせ散ってしまうものは、世の中の人の心に咲く(恋という)花であることだなあ

わびぬれば……いま私はうつうつと思ひ悩んでいて、わが身を憂いものと思っているの、浮き草の根が切れて水に流れるように、悩みを絶つて、誘う人がいたらついていってしまおうと思ひます

思ひつつ……恋しく思ひながら寝たのであの方が夢に現れたのでしょうか。夢だと知っていたら醒めずにいたのに

(などと) 詠んだのも、女の歌はこのように(あるべきだ)、と思われて、わけもなく涙ぐんでしまいます。」と(私が)言うとき、また「(小野小町の)晩年は、とても嘆かわしいですね。それ「小野小町」ほどでない人でも、そんなにまで(みじめな晩年を)過ごすことはございませんの」と言う人「女房」がいるので、(私が)「それにつけても、つらいこの世の無常が思い知られて、しみじみといたわしゅうございます。(小町は)屍になつた後までも、

秋風の……秋風の吹くたびに、ああ目が痛い、ああ目が痛い。小野にだけとは言わず、(目の中にも)薄が生えているよ

などと詠んでいるようでございますよ。(この歌は)広い野原の中に薄が生えておりましたものが、(風に吹かれて)このように聞こえたのでした。

(それを聞いた人が)たいそう気の毒に思つて、その薄を引き捨てました(その)夜の夢に、『あの頭(「されこうべ」)は、小野小町と申す者の頭です。薄が、風に吹かれるたびに、目が痛うございましたのに、(あなたが薄を)お取り捨てになつたので、たいそう嬉しゅうございます。この御礼に、歌を上手に詠めるようにしてさし上げましょう』と現れたとかいうことでございます。その夢を見た人は、道信の中将(である)と人が申しますのは、本当でございますか。(それにしても、小野小町以外の)誰が、そのように(徹底した生き方を)し得ましようか。情緒の色をも匂いをも深く味わおうとするならば、(死後も)このようにありたいものです

ね」と言うとは……（以下略）。

解答

問 1 ① 〓 ころづかい ④ 〓 さめ

問 2 ② 〓 接続助詞・仮定条件を表す

③ 〓 過去の助動詞・「き」の未然形

問 3 「恋」を花にたとえたもの。

問 4 恋しく思いながら寝たのであの方が夢に現れたのでしょうか。

問 5 (3) わけもなく / むやみに〔別解〕

(4) いやだ / 不快だ・いとわしい〔別解〕

問 6 (屍になった) 小野小町が、嬉しいと感じている。

問 7 女性たちが自ら、恋に生き歌に生きた女性の典型を求め、晩年は悲惨な死もあるが、死後も歌を捨てない小町の執念と徹底した生き方を評価しようとしている。〔72字・解答例〕

解説

問 1 読みの問題。①は「心」＋「遣ふ」の複合語で、連用形からの転成名詞である。「心遣ひ」は、「心を遣ふこと」の意で、「他人などに気を遣う」「心配り」「気遣い」のことである。

④は基本動詞。「覚む」と表記することもある。「覚醒」という熟語を思い浮かべよう。「醒む」には、ほかに「平静になる」の意もあり、「(薰は浮舟を) 焦がるる胸も、少し醒むる心地し給ひける(「世の思ひ焦がれる胸も、少々平静になる気持ちかなさるのであった」(『源氏物語』))」というように使われる。古文では「目が醒める意」として、他に「おどろく」という語が用いられることも少なくない。例えば、「(光源氏は) 少し大殿籠り入りけるに、鯛のはなやかに鳴くにおどろき給ひて(「少しおやすみになられたが、ヒグラシがにぎやかに鳴くの目をお醒ましになって」(『源氏物語』))」などと使われる。ここは「さめざらましを」と、歌の調べを整えるために、あえてこの語が選ばれたのであろう。

問2

文法説明問題。「文法的に説明しなさい」とあった場合、まず品詞を、次にそれが活用する語ならば、その基本形と文中での活用形を、そして助詞の場合は何助詞か(「助詞の種類」)を、助動詞の場合は、そこではどんな意味で使われているのか(「文法的意味」)を、あわせて記す。傍線部②・③とも一語であるが、二語以上の場合品詞分解をしたうえで以上の手順で説明すればよい。傍線部②「ば」は、接続助詞である。活用はしないが、未然形に接続している場合は仮定条件、已然形に接続していれば確定条件を表す。ここは「ば」の直前の語が、「あら」というラ変動詞の未然形なので、仮定条件となる。

傍線部③「せ」は、②とは逆に下に「ば」が来るので未然形または已然形である。「知り／せ／ば」という形が結句の「まし／を」と対応し、反実仮想の構文(もし……だったら……たのに)の構文となっている。「せば」はほとんどが「まし」と対応する場合に用いられ、「未然形+ば」の仮定条件となるのである。よって、活用形は未然形。また、未然形の「せ」は、サ変動詞「す」という考え方と、過去の助動詞「き」という考え方とがある。難しい問題だが、現在は後者の考え方が通説となっているので、従っておきたい。また、この「せ」は、奈良時代と平安時代の和歌の中にだけ用いられた。用例としては、「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(「世の中に、もし、まったく桜というものがなかったとしたら、春の人の心はのんびりしていただろうになあ」という『古今和歌集』の和歌が有名である)。

問3

内容説明問題。「何を花にたとえたものか」という問いから、比喩表現の説明を求められていることがわかる。傍線部(1)は和歌の一部なので、和歌の文脈に沿って言葉を補い、たとえられているものを導く。歌全体の構造から見よう。初・二句「色見えで移ろふものは」と提示し、三・四・結句「世の中の人の心の花にぞありける」と謎解きするような構成となっている。「色が表

に現れずに「うつろふ（＝色あせ散ってしまう）」ものといえは何？ という問いかけに対し、「それは世の中の人の心の花（＝心に咲く花）でしたよ」と解いてみせるのである。「恋の花咲く」といった言い回しをどこかで聞いたこともあるだろうが、「恋心」を「花」に例え、その「花」も自然の花と同じように「うつろふ」ものであると嘆いている歌なのである。

王朝和歌の大きな主題は二つある。「四季」と「恋」である。『古今和歌集』では、全二十巻のうち、「四季」部が六巻、「恋」部が五巻を占めている。小野小町は六歌仙の一人で古今和歌集仮名序にとりあげられた女流歌人の代表でもあった。

問4 現代語訳の問題。傍線部訳の問題は必ず品詞分解をし、単語の意味、文法事項を頭に思い浮かべ、最後に全体が文脈上どんな位置にあるかをよく考えて表現する。

傍線部を品詞に分解すると、「思ひ／つつ／寝れ／ば／や／人／の／見え／つ／らむ」のようになる。品詞分解のうえで注意しなければならぬ箇所は、「寝れ／ば／や」の「ば」と「や」、「見え／つ／らむ」の「つ」と「らむ」である。

「思ふ」は「恋しい相手を思う」の意。「寝れ／ば」は、動詞「寝」の已然形＋「ば」で、確定条件となり「寝たので」の意。「や」は係助詞。「らむ」との係り結びが成立している。

「ば」と「や」で、「ばや」という終助詞（願望）があるが、この語は未然形接続であり、「寝れ」が已然形であることに注意すれば、「ば」と「や」に切ることができる。

ちなみに、「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花（『古今和歌集』・百人一首にも所収）」の場合はどうなるだろうか。これも「折ら／ば／や／折ら／む」が正しい。これは「もし折るとしたら折ろうか」の意である。和歌の意味は、「初霜が置いて一面真っ白で、どれがそれかわからないほど私を惑わしている白菊の花を、『折らばや折らむ（＝折るなら折ろうか）』と言っている。この場合は「未然形＋ば」であるから、より一層「ばや」との区別が難しい。「や……む」の係り結び（疑問）に気づくとともに、歌全体の構造（句切れ）への着眼が必要となる。

傍線部の説明にもどる。「人」は「恋しい人」の意。「の」は主格の格助詞で「が」と訳す。「見え／つ」の「つ」は完了の助動詞。「らむ」は現在推量の助動詞で連体形。ここで係り結びとなり、三句切れとなっている。「や……らむ」で、「……だろうか」という疑問文になる。「つ／らむ」は、「らむ」という終止形接続の助動詞を知っていれば、正しく切ることができる。

問5 単語の意味の問題。(3)・(4)ともに単語としての知識も必要だが、文節の役割に合わせた訳を書くこと。

(3)「そぞろに」は、「そぞろなり」(形容動詞)の連用形で漢字表記は「漫」。「すすろ」という語形もあるが同義である。基本的には「これといったはつきりした根拠や原因がままに、事や心が進むさまを表す」のである。ここから口語訳は、「なんといふこともない・関係がない」「むやみに・やたらに」の二つにまとめることができる。「涙ぐましく」に接続する連用形だから、意味も連用形で書く。

(4)「うたて」は、「事態や気持ちがどんどん進行するさま」から「悪い方向に進むのを不快に思う気持ち」をいうことが多い。口語訳としては「気味が悪い・不快だ・氣にくわない」などが多い。本文では、小町の「老いの果て」を「うたて」と言っているので、嫌悪感を表す言葉ならたいいていの表現があてはまる。

なお、用法によって「うたてし」を形容詞、「うたて」を副詞とするのが一般的であるが、本質的には同じ言葉である。これは、(3)の「そぞろに」を副詞とするか形容動詞とするかの相違も同様であって、ここではそうした品詞の違いは問題にされていない。

問6 心情の主を問う問題。こういう問題は、傍線部の前から動作主・会話主などをはつきりと補って訳してくるとわかりやすい。問題文全体から気づいたであろうが、この場面は多くの会話文から成っており、現代語訳に「」で示した通りである。傍線部(5)の前をたどると、1行前に「その薄を引き捨て侍りける夜の夢に」とあって、傍線部(5)は夢の中の会話文であることがわかる。

「かの頭をば、小野小町と申す者の頭なり」と説明したのち、「薄の、風に吹かるるたびごとに、目の痛く侍るに、引き捨て給ひたるなむ」「薄が、風に吹かれるたびごとに、目が痛うございましたのに、引き捨ててくださったので、いとうれしき」と、自ら小野小町の化身であることを告げている。

問7 問題文全体の内容から要旨を読み取り説明する問題。設問文に「小野小町を例にして、この憂き世を生きる支えとして何を求め、何を評価しようとしているのですか」とあり、これが解答作成のための土台である。まず、これを利用して本文に分析を加えていく。そして、「何を求め、何を評価」という箇所にあてはまる内容を本文中から見つけ、最後に字数を七十字前後に調整しつつ設問文の質問形式に合わせて完成させるという手順になる。

それでは、まず、本文の「小野小町」について書かれている部分に分析を加えてみよう。本文1行目に、「小野小町こそ、」

とあって、小町の特徴・個性・評価などがまとまっていることがわかる。これは、ある人物（「作者」）の最初の発言である。この発言は、本文冒頭「色を好み歌を詠む者、」から、6行目「そぞろに涙ぐましくこそ」までになる。この発言では、「小野小町こそ……何事もいみじかりけむ」と、小町が女性としてあらゆる点ですぐれていたということを述べ、そして、三首の「恋」を主題にした和歌を並べて、それに対して、「女の歌はかやうにこそ、とおぼえて、そぞろに涙ぐましく」と評価し、「恋」と「歌」に生きた女性への絶賛の言葉があるとみることができ。したがって、この本文の前半部には「恋に生き歌に生きた女性の典型」が示されているといえよう。これが、設問文の「問題文は、小野小町を例にして、この憂き世を生きた女性たち」と言い換えることができない。設問文の「問題文は」も、「問題文中に登場し発言する女性たちは」と言い換えることができる。女性たちは「憂き世を生きた支え」として小野小町的な生き方（「恋と歌に生きる人生」）にあこがれたわけである。

さて、本文の後半、6行目に、「また、老いの果てこそ、」と、別の女性らしい人物によって小町の晩年のみじめな姿に話題が及ぶと、それを受けて、「それについても、憂き世の」から始まり、最終行まで、小町の晩年・死後の落魄ぶりを語る人物が話をしめくくる。話し合う女性たちにとって、この後半の部分がよりいっそう小野小町の女性としての徹底した生き方への共感を呼んでいるようなのである。

13～14行目、「誰かは、さることあるな。色をも香をも心にしむとならば、かやうにこそあらまほしけれ」の「かやうに」は、「死後もこのように歌を捨てない」といった意味であり、女性としての生き方を死後も徹底して貫いたという解釈であり、そうした評価が「あらまほし」なのである。後半部の、小町の死後の逸話はあまりに残酷な話である。若き日の美女が生きながら、老婆になり、無残な死骸となるという言い伝えは、もともと仏教の教理を説くために都合のよいものであったために広まったらしいのだが、この『無名草子』においては、女性が恋と歌に生き「死後もその生き方を貫いたこと」への評価となっている。これが、設問文の後半「何を評価しようとしているのですか」に対応する答えの核となるのである。

それぞれの答えを組み合わせると、「女性たちが自ら」「恋に生き歌に生きた女性の典型を求め」「晩年は悲惨な死もあるが、死後も歌を捨てない小町の執念と徹底した生き方を評価しようとしている。」との解答に至ることができる。字数は七十字前後であり、四捨五入して七十字になるようにしておけばよいだろう。

《古文補充問題》

現代語訳

問1 童が、衲や袴をこざつぱりと着て、さまざまな物忌札を付け、化粧して、「私は劣るまい」と競っている様子で行き交う様子は、趣深く見えるが、

問2 きつとおりてしまいたくなっているのだろう。

問3 尼上は「たいそう畏れ多いことでございますよ。せめてこの君(「若紫」)が、御礼を申し上げなさることだけでも確かにできる年齢であったならばよかっただろうに。」とおっしゃる。(源氏はそれを)しみじみと聞きなされて、「どうしていい加減に思いますことで、こんな好色めいた振舞いを見せ申し上げるでしょうか(いや私は本気だからこそ、こうして言い寄っているのです)。…」

問4 菩薩が来た。…徳の高い僧が泣きながら低頭合掌し慎み敬って、後ろにいる獵師に言うには「どうだ。あなたは拝み申し上げなさるか。」と、

問5 A 逢うことも今となっては無く、泣きながら寝る夢の中ではなくて(現実で)いつあなたに再び逢うことができるのだろう、今となってはもう逢うことができないよ

B 秋風が吹き返す葛の葉の裏を見るというわけではないが、恨んでもなお恨めしいことよ

解答

問1 (ウ)

問2 (エ)

問3 せめてこの君（若紫）が、御礼を申し上げなされることだけでも確かにできる年齢であったならばよかつただろうに。

問4 1 ㍑ (イ) 2 ㍑ (キ) 3 ㍑ (ア) 4 ㍑ (カ) 5 ㍑ (ウ)

問5 A 「なき」が「無き」と「泣き」との掛詞

B 「うらみ」が「裏見」と「恨み」との掛詞・「秋風のうち吹きかへす葛の葉の」が「うらみ」を導く序詞

出典：『春秋左氏伝』／立教大学 01年

書き下し文

楚その人、鼃げんを鄭ていの靈公れいこうに献けんず。公子宋こうしそと子家しかと、將まさに入りて見まえんとす。子公しこうの食指しよくしうこ動もつく。以もつて子家しかに示しめして曰いわく、「他日たじつ我われ此かのごとくなれば、必ず異味いみを嘗なめたり」と。入いるに及びて、宰夫さいふ將まさに鼃げんを解とかんとす。相あひ視みて咲わらふ。公こう之これを問とふ。子家しか以もつて告つぐ。大夫たいふに鼃げんを食くらはしむるに及びて、子公しこうを召めして与あたへず。子公しこう怒いかる。指ゆびを鼎かなえに染そめ、之これを嘗なめて出いづ。公こう怒いかり、子公しこうを殺ころさんと欲ほつす。子家しかと先まんぜんまと謀はかる。子家しか曰いわく、「畜ちくの老おいたるすら猶なほ之これを殺ころすを憚はばか。而しかを況いわんや君きみをや」と。反かえつて子家しかを譖そしらんとす。子家しか懼おそれて之これに從したがふ。夏なつ、靈公れいこうを弒しいす。

現代語訳

楚の国の人が、大きなすっぱんを鄭の靈公に献上した。(献上されたころ、ちょうど)公子・宋(「子公」と、子家(「公子・帰生」とが、いまにも御殿に参上して、(靈公に)お会いしようとしていた。(すると)子公の食指(「人さし指」)が、びくびく動いた。そこで、(子公は)その食指を子家に見せながら言った、「今まで、私は、このように食指が動くと、きまって珍味を味わえたものだ」と。(二人が、御殿に)入ると、料理人がいまにも大きなすっぱんを料理しようとするところだった。(そこで、二人は、子公の言ったとおりだと思って)お互いに顔を見合せて笑った。靈公は、二人が笑った理由を尋ねた。(そこで)子家がさっきの二人のやりとりを話した。(さて)いよいよ大夫たちにすっぱん料理を御馳走しようという時になって、(靈公は、わざわざ)子公を呼び寄せておきながら、(子公には)すっぱん料理を食べさせなかった。子公は怒った。(そこで)指を(すっぱん料理の入っている)鼎(「三本脚の金属製の釜」)につっこんで、その指をなめながら退出した。靈公は怒って、子公を殺そうと思った。(ところが)子公は、子家といっしょに

なって、先手をうって霊公を殺そうと、相談をもちかけた。子家は言った。「年老いた家畜でさえ殺すのは気がすまないものだ。まして、自分の主君を殺すなんてなおさら気がすまない」と。(すると、子公は)逆に、子家を(おとし入れるために、霊公に対して)中傷しようとした。子家は、(罪を着せられるのを)おそれて、子公の策略に乗った。(こうして二人は)夏に霊公を殺した。

解答

問1 5

問2 2

問3 5

問4 4

問5 いわんやきみや(と)。

書き下し文

董卓 大権を専らにせしよりの後、毎日飲宴し、更深くして方めて散ず。李儒急を告ぐるの文字に接して、徑ちに來りて丞相に稟覆せり。董卓大いに驚き、急ぎ衆將を聚めて商議す。卓曰く、「今袁紹と曹操、各路の太守の軍馬を聚め、直ちに関前に抵れり。衆將何の妙計か有る」と。温侯呂布身を挺して出でて曰く、「父親よ、慮る勿れ。吾関外の衆多の諸侯を観ること草芥のごとし。親ら虎狼の師を提げ、尽く其の首を斬り、都門に懸くるは、呂布の願ひなり」と。卓大いに喜びて曰く、「吾に奉先有れば、枕を高くして憂ひ無し」と。言未だ絶えざるに、呂布の背後の一人、高き声にて出でて曰く、「鶏を殺すに焉んぞ牛刀を用んや。必ずしも温侯虎威を勞すること有らず。吾衆の諸侯の首級を斬るを観ること、囊を探りて物を取るのごとし」と。卓之を視れば、其の人身の長は九尺、面は血を噴けるがごとく、虎の体に狼の腰、豹の頭に猿の臂、関西の人なり。姓は華、名は雄、卓の帳前の第一員の驍將なり。卓其の言を聴き大いに喜び、加へて驍騎校尉と為す。

現代語訳

董卓は、(宰相として)絶大な権力を一人占めして以来、毎日酒宴を開いては、夜ふけになってや々と散会(する)という日々を過(こ)していた。(そんな時、董卓の臣下の)李儒が、(反董卓連合が押し寄せてきたという)差し迫った危険な事態を告げる文書を受け取ると、すぐにやって来て、丞相である董卓に報告申し上げた。(報告を受けた)董卓は大いに驚いて、急いで將軍達を召集して(善後策)を協議した。董卓は言った。「今、袁紹と曹操とが、各地の郡の長官を軍隊を集めて、あつという間に(汜水)関の近くまで押しよせて来ている。おまえたち將軍に、何か良い策はあるか。」(董卓の義子である)温侯・呂布が身を投げ出すようにして強く進み出て言った、「父上よ、心配なさるな。私は、関外に(押し寄せてきて)いるたくさんの諸侯どもなど、雑草やごみのような取るに足りないものにはか思っています。 (ですから)私自身が、虎や狼のように勇猛な軍を引き連れて(戦い)、一人残らずやつらの首を斬り落とし、都の入り口の門に懸けることが、私、呂布の願ひです。」董卓は大いに喜んで言った、「私には義子の呂布がいるので、枕を高くして安

心して寝られ、何の心配もないなあ。」その言葉がまだ終わらないうちに、呂布の背後にいた一人（の男）が、声を張りあげながら進み出て言った、「小さな鶏を切り割いて料理するのに、どうして牛を料理するのに用いる大きな庖丁を使う必要がありませんか。」「『小さな事をなすのに大人物の必要はありません。』（この場合は）必ずしも、温侯ご自身が、その虎のような大將軍の威勢を用いて骨を折られる必要はありません。私は、たくさんの諸侯の首を斬り落とすことなど、袋の中のものを手で探って取るように、簡単にできることだとは思っていません。（ここは私の出番です。）」董卓が、この声の主を見ると、その男は、身の丈が九尺、面構えは血を注いだかのように赤く、虎のような体、狼のような腰、豹のような頭に猿のような腕といった（とても人間とは思えないほど強そうな）姿形で、函谷関以西出身であった。姓は華、名は雄（と言って）、董卓の軍営を守る、第一の勇猛な大将である。董卓は彼の言葉を聞いて大いに喜び、騎兵隊長の驍騎校尉という役職に位をあげてやった。

解答

問 1 (今) 袁紹曹操、聚各路太守軍馬、直抵関前。(2〜3行目)

問 2 衆將何の妙計か有る(と)。 / (別解) 衆將何の妙計有りや(と)。

問 3 私には頼もしい呂布がいるので、安心していられるということ。〔29字・解答例〕

問 4 にわたりをこらすにいくんぞぎゅうとうをもちいんや。

問 5 鶏 〓 袁紹と曹操が集めた、各路の太守の軍隊。 牛刀 〓 呂布の率いる虎狼の軍隊。〔いずれも解答例〕

問 6 必ずしも、温侯ご自身が、その虎のように雄々しい武将の威勢を用いて骨を折って戦われる必要はありません。〔50字・解答例〕

問 7 a

問 8 華雄

問 9 ウ・オ・カ・キ・ケ

問1 傍線部中の「急」は動詞に下接して《客語（＝直接目的語）》となっているので、ここでは名詞で、「事態が差し迫ること／差し迫った事態」の意で解釈する。「急迫・危急・応急・救急」などの「急」に同じだ。「文字」という語には「語」、ひいては「文」の意味もある（「漢字」は厳密には表意文字ではなく《表語文字》で、「字」は「辞（語）」および「音」に対応する）。よって「告急文字」は文脈上「危急の報せ」程度の意味となる。

問2 漢文における主語は、英語と違って文の表現上に必須の要素ではない。英文の感覚で「主語・述語」のセットを探そうとしたり、まして「主語」から探そうとしたりすると、失敗しやすいので注意。漢文訓読の基本は「《述語》を見つける」ことであり、その過程では助辞に代表されるような「文法的な働きの比較的明確な字（＝語）を目印にする」のがコツだ。

傍線部中で目立つのは「何」の字で、これは疑問を示して《副詞》・《形容詞》・《代名詞》となることが多い。ここでは下に「妙計」とあってこれは「妙案」の同義語として名詞と見ることができから、その上の「何」は形容詞ということになる。「何」が形容詞のときは下接の名詞に「か」を送って「何の○○か」と読むのが原則だから、文末の三文字は合わせて「何の妙計か」と読めばよい。

とすると述語は「有」となる。「所有・保有」でわかるように本来は「（く）を」持つ・保つ」意味の動詞だが、日本語の習慣で「あり」と訓読することになっているので、本来の《客語（＝直接目的語）》である下接の名詞は、訓読文ではあたかも主語であるかのように、助詞「を」は送らずに読むことになる。

述語「有」の直前に「将」があつて、一見すると副詞のいわゆる「再読文字」のようでもある。しかし、ここでは問題文2行目に「急聚衆將」とあるので、これを承けて同じ用法で「衆將」を名詞と見ることになる。前後関係への目配りを軽視してやみくもに「句法」の類いを暗記しただけで漢文が読めると勘違いしている諸君をひっかけようとする問題でもある、ということか。

ここで最後の詰め。文中に「何」があるので傍線部全体は《疑問》・《反語》のどちらかになるはずだ。ここで反語にとると、「どんな素晴らしい計画があるというのか、いやあるわけがない」となつて、「負けるに決まっているから早くみんなで逃げよう」などという話になってしまう。ここは《疑問》文と解釈して、訓読文の文末は単純な係り結びで読めばよい。なお、一般的に疑問文の文末は係り結びによって連体形となるから、文末に助詞を送るには「か」を用いることが多いが、ここでは訓読文中「何妙

計」を読むときにすでに「か」を用いているので、文末に「か」を送ることはできない。(別解で係り結びを用いない形も示した。この場合は文末が終止形となるので、疑問の終助詞を送らないと疑問文に聞こえない。終止形には「や」を送る。接続の違いに注意すること。)

なお、設問には「書き下し文にせよ」とあるのみなので、漢字仮名交じりで書くことになる。この場合、漢文中での品詞とは無関係に、訓読文中で日本語の《自立語》を使って読んだ字は漢字で書き、《付属語》を使って読んだ字は仮名書きにするのが原則だ。この問題では傍線部の漢字をすべて日本語の自立語で読んでいるので、仮名に直して書くべき文字はない。

問3

傍線部の「奉先」は(注)から「呂布の字」とわかる。「字(あざな)」は元服するときにつける社会的な本名だから「奉先」は「呂布」と同一人物だ、ということの理解が採点者に伝わるように、「呂奉先」または「呂布」と表現するとよい。字数制限のあることだから「呂布」という表記を勧めておく。理窟で言えばもう一字詰めるために呂布の名で「布」と書いてもよいことになるが、「布」では人名でなく「ぬの」に見えてしまうのでやはりこれは避けよう。「名」と「字」を両方使って「呂布奉先」とする習慣はない。文中に名が見られる「曹操」は「曹孟徳」のことを「名」で呼ぶ言い方だが、「曹操孟徳」とは呼ばれないし、そのライバルも「劉備玄徳」ではなく「劉玄徳」または「劉備」と呼ばれた。「諸葛孔明」の「諸葛」は複姓すなわち二字の苗字で、「名」で呼ぶなら「諸葛亮」となる。)

「有」には出題者が「レバ」と已然形活用語尾を送って条件接続の形を提示してくれている。ただし、漢文訓読においては《順接》も《逆接》も、また《確定》も《仮定》も、条件接続はすべて「《已然形》+ば」で読んでよいことになっているので、出題者がそう読んでいるときはあらゆる条件接続の可能性があり、接続の種類については解答者が解釈するときに改めて吟味する必要がある。ここでは、傍線部後半に対してその理由として働くと考えられるから、《順接確定条件》として解釈すればよい。

「高枕＝枕を高くする」は現代日本語でも漢文での意味のまま「安心して眠る」ことを言う慣用句でこれは常識。たとえ知らなかったとしても「憂ひ無し」と続くのだから「枕」が「睡眠」の関連語だと気付くことはできるだろう。文章後半の華雄の発言内容からわかるとおり、呂布は董卓の麾下で随一の猛将として知られる人物だから、いかに袁紹・曹操の連合軍が強いといっても、呂布に迎撃を任せておけば親玉の董卓は安眠できる、というわけだ。

問4

問2の解説も参考にしてもらいたいところだが、本問では返り点は与えられているので少しは楽か。傍線部で述語成分と見做せる字は返り点から「殺」と「用」、とすると「殺鶏」の《節》と「焉用牛刀」の《節》との関係が問題になる。先行する「殺鶏」は構造が単純だから、後半の読みを考えてみよう。

「用」を《述語》と見ると、直前の「焉」は位置から副詞だということになる。この場合「焉」は《疑問・反語》の副詞で「いづくんぞ」と読まれる。「焉用牛刀」は《疑問》で「なぜ牛刀を用いるのか」または《反語》で「牛刀など用いる必要はない」のどちらかだろう。ここでは続く文に「不必……有……」とあることを根拠に《反語》と判断するのが妥当だ。「焉くんぞ牛刀を用ゐん」と読めばよい。なお、反語文末には「や」を送ることも多く、ここも「用ゐんや」としてかまわないが、訓読文中にすでに係助詞「ぞ」があるので「や」は省いてもかまわない。

つぎに前半「殺鶏」の処理。後半に対して《名詞節》として《主語》（「鶏を殺すということ」）の意味になる可能性もあるが、後半の意味とのつながりを考えると採用できない。ここは「殺鶏」にあたっての意味にとれば十分なので、簡単に「鶏を殺すに」と読んでおけばよい。

と、長々と書いてきたが、右は傍線部を利用して文法の使い方を確認しようとしたまでのことだ。この表現が『論語』の「割鶏焉用牛刀（鶏を割くに〜）」を典拠として「些末なことに対処するのに大仰な道具はいらない／ちょっとしたことには大げさに騒ぐことはない」という意味になる《故事成語》だということに、気付くことができれば右に述べた諸注意はほとんどスキップして正解が得られる。孔夫子は上品に「割（カツ）」と言っていたところを、辺境出身の武人が気取って引用しようとしたら、（発音こそ似ているが）「殺（サツ）」と言っちゃった、というところで「田舎者で教養も中途半端な武張った男」のイメージが醸し出されるという御愛嬌である。

ここで、答案を書くときに落とし穴が仕掛けられていることに注意。設問文中の「読む通りに」という表現に注目する。「入試問題なんだからそんなの自明じゃないか」と言いたくもなるが、これは実は「設問用語」で「現代仮名遣い」を要求する出題意図を示しているのだ。「いづくんぞ」「もちろん（もちひん）」は旧仮名遣いだから、「づ」を「ず」、「ゐ（ひ）」を「い」としておかなければならない。どこか一ヶ所でも旧仮名遣いで書いてしまうとそれだけで「設問指示を守っていない」という理由から0点にされてしまうし、問2と違って漢字仮名交じりにしてもやはり0点となる。設問指示を遵守することに最後まで気を抜かず答案を書くことだ。

なお、「牛刀」「鶏」は、旧仮名遣いでは「ぎうたう」「にはとり」となる。「現代仮名遣い」の指示がなければ旧仮名遣いの答案でもよいし、むしろ本来なら書き下し文は旧仮名遣いが当然というべきなのだが、現代の大学入試ではとくに指定のないかぎり現代仮名遣いを勧める。どちらかにせよとの指示がなくても、仮名遣いが統一されていないと逐一減点されるからだ。

問5 問4に続いて《故事成語》の知識を利用する問題。「鶏」は「瑣末なこと・ちょっとしたこと」であり「牛刀」は「大仰な道具・大騒ぎすること」である。傍線部を含む発言の続きを見ると、「呂奉先さまのような大將軍にわざわざ御出陣いただくまでもなく、『斬衆諸侯首級』には拙者で十分でござる」と言っていることになる。「牛刀」が「大將軍」に対応することはわかりやすい。

さて、「鶏を料理するなら牛刀のような大きな刀でなくペティナイフで足りる」というのだから、「鶏」は言葉の表面的には「料理する対象」だ、ということも確認しておこう。「料理する相手」はこの発言の中では「衆諸侯」だが、これをはさむ「斬……首級」で明らかに敵の將軍たちの話だとわかる。「衆諸侯」を日本語に直しただけで答案とすると、発言者の味方である董卓軍の將軍たちと区別がつかない（2行目では「衆將」と言っている）ので、得点は認められない。設問では「文中の語句を用いて」とあるから抜きだしの問題ではないが、董卓側から見た敵方の將軍たちだということがわかる表現を文中に探したうえで、それを十分に使って説明することだ。

（なお、「首級」は「討ち取った敵の首」のことで、中国の戦国時代の秦の法では敵の首をひとつ取ると將兵の階級がひとつ上がったということに由来するという。日本でも「首級をあげる」という慣用句では「シユキユウ」と音読みすることもあるが、熟字訓で「しるし」と読むことも多い。）

問6 傍線部の「必」は《程度の副詞》だから「不必」で《部分否定》となる。「不必……有」で「わざわざする必要はない」程度の意。その「〜」の「労虎威」については、訓点から「虎威を労する」と読める。「虎」は多くは「勇猛果敢」の象徴的な表現だ。（虎が獲物を狙う様子からときに「老獪」を意味することもあるが、傍線③の表現と考え合わせると、ここでの文脈には不適合。）

問題は「温侯（＝呂布）」の位置だ。「不必」のあとにあるので、これは文全体の主語ではなく、《節の主語》として働いている。したがって傍線部は「大將軍がお出ましになるまでもない」ということである。

問7 傍線部の「囊」は諸君はあまり見かけないかもしれないが、音は「ノウ」、訓は「ふくろ（＝袋）」という字だ。日本語での使用頻度が低いためにかえて目立つのでつい選択肢fに目が行くだろうが、聞かれているのは「同じ意味を持つ故事成語」であって、フレーズ全体の意味が一致しなければならない。

傍線部は発言の最後にあり、問4・問5・問6と解説してきたことから、傍線部では「(大將軍を煩らわせるまでもなく、私程度の者にとつても) たやすいことだ」と言っていることはもうわかっていると思う。

選択肢の故事成語はどれも現代日本語でよく使われている。また漢文の出題では故事成語・慣用句に関する知識を問うことも多い。意味に不安のあるものがひとつでもあるなら、念のためすべてを国語辞典で確認すべきだ。

問8 問題文9行目に人物紹介の一部として「姓華、名雄」とあるので、「人名」としてはそれぞれの固有名詞部分をつないで「華雄」とするだけのことだ。ただし、念のために確認するが、問われているのは「人名」そのものであり、設問に「文中の語を用いて」とあることから「単なる抜き出しでは得点を認めない」と言っていることにも注意しておく必要がある。「姓華名雄」とか「名雄」とかでは「説明」ではあっても「人名」ではない。

問9 大学入試において、日本の古文では、古典文学史の背景知識を利用して読解することが強く求められている。それはそれとして注意すべきだが、中国古典文学史について詳しい知識を要求する大学はほとんどない。ただし、現代の高等学校教育課程では「地歴」という教科の「世界史」という科目が必修となっている。センター試験レベルの中国史の知識は読解に必要とされ、その応用として本問のような知識問題も時折みられる。選択肢はいずれも『国語便覧』などの受験資料集で簡単に見つかるはずだから、探してみるとうい。念のため、読みだけは記しておこう(ア・エは読めるね。キは齊天大聖孫悟空の「さいゆうき」、イ「せつもんかいじ」、ウ「すいこでん」、オ「こうろうむ」、カ「りりょうさいしい」、ク「そじ」、ケ「きんぺいばい」、コ「もんぜん」)。

なお、漢文で言う「小説」とは文字どおり「小人(＝つまらぬ者)の読み物」の意である。漢文という書き言葉の本来の用途は「経国の大業(＝天下を治めるまつりごと)」に資することにある、という思想から、娯楽に供する文章を低く見た言い方である。明治中期の日本文学で西欧近代の「ノベル」に相当する文芸を育てようとしたときにこれを「小説」と呼ぶことになったので、現

代日本で「小説」といつてもとくに「価値のないもの」といった意味で用いることはないだろうが、漢文ではあくまでも「文章の中で地位の低いもの」といった位置づけである。『三国志』は朝廷の責任で編纂する「正史」のひとつとして文学的地位が高く、その正史『三国志』で帝王の伝記たる「本紀」に分類されるのは（後漢の禪譲を受けた形になっている）魏朝の皇帝だけが、『三国志演義』はその時代の人物や事件を題材として創作した「小説」にすぎない、というのが中国での評価だ。まあ、「皇帝が三人いた」というのは中国では「空に太陽が三つあった」というのに等しいから、庶民は面白がるだろうが、知識人からすれば知識人相手に表立って話題にするのは恥ずかしいようなものだった、ということだ。

《漢文補充問題》

書き下し文・現代語訳

問1 1 書き下し文|| 如し詩成らずんば、罰は金谷の酒数に依らん。

現代語訳|| もしも詩ができれば、罰として金谷での故事にならつて酒を飲ませることにしよう。

2 書き下し文|| 百聞は一見に如かず。

現代語訳|| 百回聞くのは一回自分で見るのに及ばない。

3 書き下し文|| 子の矛を以て、子の楯を陥さば何如。

現代語訳|| もしもあなたのその矛で、あなたのその楯を突き刺したらどうなるか。

問2 ※書き下し文・現代語訳ともテキスト参照のこと。

解答

問1 1 読み|| もし 意味|| (オ) 2 読み|| しかず 意味|| (ウ) 3 読み|| いかん 意味|| (イ)

問2

1 苟^{クモ}無^ク恒^{コウ}心^{シン}、放^{ホウ}辟^{ヒツ}邪^{ジャ}侈^シ、無^キ不^レ為^ル已^サ。

2 願^ワ下^カ為^ニ重^{ジュウ}盛^{セイ}死^シ上^{ジョウ}者^{シヤ}、二^ニ百^{ヒャク}余^ヨ人^{ニン}。

3 我^ガ丈^{チヤウ}夫^フ也^ヤ、何^{ナニ}畏^レ彼^カ哉^ヤ。

4 割^クレ^ニ鶏^ニ、安^{ヤス}用^{ヨウ}ニ^ニ牛^ウ刀^{トウ}。

5 豈^ニ遠^{シト}二^ニ千^{セン}里^リ哉^ヤ。

6 人^ニ而^{シテ}不^レ仁^ニ、如^レ礼^ヲ何^{セン}。